

ジェルソー、C. J.・フリッツ、B. R. 著、清水 里美 訳
『カウンセリング心理学』

(原著 : Gelso, Charles J. & Fretz, Bruce R. (2001). *Counseling Psychology* (2nd ed.). Belmont, CA: Thomson Wadsworth , 652 pages, ISBN 0-15-507156-4)

大野 精一

本書は「広範な科学性 science と専門（職）性 profession をもつ（応用）心理学と言う学問体系のなかの主要な一専門領域である」「カウンセリング心理学に関する入門書 introductory text on counseling psychology」(p.2 : 2 頁、p.630 : 593 頁)である。ここでは入門書 introductory text という言い回しに注意しておきたい。本書は決して初級者向け primer の論説や解説ではなく、カウンセリング心理学の全体系へと導く原典 introductory text を目指したものと言える。本書に a beginning text (p.v : i 頁) という表現も見られるが、他の心理学分野には specialized books があるのに、カウンセリング心理学だけが例外だったとしているので、こう解していいだろう。

こうした意味の「カウンセリング心理学」という日本語訳でも読める著書を、私は寡聞にして知らない。例えば、國分康孝著『カウンセリング心理学入門』（PHS 新書・1998 年刊）はカウンセリング心理学の非常に優れた初級者向け primer の解説書であり、渡辺三枝子著『新版カウンセリング心理学—カウンセラーの専門性や責任性』（ナカニシヤ出版・2002 年刊、旧版は 1996 年刊）はカウンセリング心理学の歴史に注目しながらカウンセラーやカウンセリングという実践活動の専門性や責任性を明確にしようとした名著で、この二著とも当然に日本という文化環境を前提に書かれたものである。また近刊の福島脩美著『総説 カウンセリング心理学』（金子書房・2008 年刊）や國分康孝監修『カウンセリング心理学事典』（誠信書房・2008 年刊）は日本における Counseling Science を総説したり体系的に記述したもので、最新の成果が満載されている。ただ、今も私が痛切に知りたいと思うのは、カウンセリングという実践活動を支えている心理学的な土台としてのカウンセリング心理学 Counseling Psychology の包括的で全体的な体系なのである。

本書は Steven D. Brown & Robert W. Lent (Eds.). (2008). *Handbook of Counseling Psychology* (4th ed.) Wiley:Hoboken, New Jersey, 639 pages, ISBN 978-0-470-09622-2 に度々引用され (pp.34,86,94,483)、さらに本書の著者の一人 (Charles Gelso) はこのハンドブックの寄稿者である。本書は現時点で私の希望をかなえてくれる唯一の本である。

本稿では 3 つのテーマに絞って本書を紹介していく。その上で日本におけるスクールカウンセリ

ングあるいは学校教育相談の特殊性を浮き彫りにしたいと思う。

先ずはじめに本書の構成を見ながら、カウンセリング心理学の全体像（特徴・特長）を明らかにする。本書の構成は次の通りである。

はじめに／第1章 カウンセリング心理学とは／第2章 専門職分野としてのカウンセリング心理学の発展／第3章 カウンセリング心理学における研究と科学／第4章 現代社会の変化と心理専門職／第5章 サイコロジストとしての倫理／第6章 社会の文化的多様性とカウンセリング心理学／第7章 カウンセリングサイコロジストになるために／第8章 治療関係／第9章 クライアントへのカウンセラーの応答／第10章 精神分析的アプローチ／第11章 行動主義的アプローチと認知的アプローチ／第12章 第3勢力：人間性・体験的アプローチ／第13章 新しい時代におけるアセスメントの科学と実践／第14章 キャリア心理学：画期的出来事と最前線／第15章 キャリアカウンセリングとキャリア介入／第16章 治療的グループワーク：一つの確立された形式／第17章 作動するシステム：家族とカップルへの介入／第18章 予防的介入と教育的発達の介入／第19章 コンサルテーション：他者に力を与える／付記 credits・人名索引・事項索引

（日本語訳書には冒頭に「日本の読者のみなさんへ」、巻末に訳者あとがき・著者、訳者の紹介がある。また本原著の初版は1992年刊である。）

カウンセリング心理学は上述の構成でもわかる通り治療 remedial、予防 preventive、発達促進 developmental といった極めて多様な役割や内容 diversity を有するものであるが（p.22：21頁）、それらを総括するとどのような特徴・特長が見いだせるのか。本書ではこれらを次の5つにまとめている（pp.6-10：6-10頁）。

- 1) 個人のパーソナリティに関して重度の障害を受けている部分ではなく、健康な部分 intact opposed to severely disturbed personalities に焦点を当てる。健康なパーソナリティ、「正常範囲」に近い問題やクライアントに主眼を置く。
- 2) 障害の程度ではなく、人の強さや資質 assets and strengths に注意を向ける。重度の精神障害者に対して働きかける場合でも彼らの持つ強さや資質に注意を向ける。
- 3) 比較的、短期間の介入 relatively brief interventions に重きを置く。
- 4) 人か環境かのどちらかに焦点を当てるのではなく、人と環境との相互作用 persons-environment interactions に注目する。個人の特性ではなく、人と環境との相互作用に重点を置く。
- 5) 教育・キャリアの発達・環境 educational and career development and environment を重視する。個人の教育やキャリアの発達、および教育環境・職場環境を重視する。

上記のカウンセリング心理学の5つのテーマは、臨床心理学や学校心理学、産業・組織心理学、新しくは神経心理学、健康心理学等の役割や内容といくつか共通するものを持っているが、カウンセリング心理学はこれらすべてのテーマが反映している専門領域であり、その特殊性はこれらの5つのテーマをすべて具体化することから得られるものである。だからこそ、「コンサルテーションは、一つの望ましい介入 a preferred intervention として、また「科学者でもある実践家」として

のカウンセリングサイコジストのあらゆる重要な役割を統合したもの a synthesis of all the key roles of counseling psychologist as scientist-practitioners と考えることができるだろう」(p.632 : 595 頁) と本書を総括することになるのである。

カウンセリング心理学者 (カウンセリング・サイコジスト) はカウンセリングの実践家 counseling practitioner として画一的な線引きができない現実の多様なニーズを実際に満たす必要がある。こうなると、個々のカウンセリング・サイコジストも当然多種多様であろう。しかし「我々カウンセリング・サイコジストは内的な同一性を核に持ちながらそれぞれに多様であることを祝福している」(p.43 : 40 頁) という。さらに専門職として効果的に (事後評価も含む) 現実のニーズを満たすためには科学者 scientist または研究者 researcher としての教育も同時に受けなければならないのであろう。これが応用心理学としてのカウンセリング心理学における「科学者でもある実践家」モデル the scientist-practitioner model である。問題なのは、科学者 scientist または研究者 researcher であるとはどんなことなのかである。これが本稿の 2 番目のテーマで、本書ではそれらを 3 つのレベルに分けて説明している (pp.52-57 : 48-53 頁)。

第 1 のレベルは「研究の結果を論評したり、利用したりする能力」で、研究成果を正確に理解しその結果得られた知見 (科学的に言えばどのような方法が用いられるべきか等) を自らのカウンセリング実践に活用できなければならない。

第 2 のレベルは「自分の仕事について科学的に考え、実行できること」で、批判的な思考スタイル (批判的に考え、十分に懐疑的であれ) やクライアントへの科学的な働きかけ (クライアントについて、その問題は何か、最も良い介入法は何か、この介入に関してどのような反応か等につき仮説を設定し、臨床実践の場で検証をし、これらを継続的に繰り返す) を重視することである。

第 3 のレベルは「職場状況に関係なくキャリアの一部として実際に研究 research を行えること」で、最低限として「仮説を組み立て、独創的な問いを発する conduct original inquiry」ことである。

「科学者でもある実践家」モデルではこれら 3 つのレベルをどのように把握しているのであろうか。「科学者 scientist でもある」のだから、当然にも科学者 scientist だけで閉じられるような科学者 scientist のあり方ではあるまい。実践家 practitioner へ向けて開かれている科学者 scientist とはどのようなものなのであろうか。本書では心理学を中心にしながら研究 research (実証的研究 empirical research) や科学 science、学究活動 scholarly work という用語検討を通じてこの問いに答えている。

実際に行われている心理学の研究 research はせいぜいのところ「自分たちの観察が調べている特定の現象について偏った結論を導かないようにできるだけ条件を統制し」、「何らかの数量化を行った上でこれまでの「研究努力をさらに積み重ねるように研究理論とともに一つのまとまった知識を確立すること」でしかない。一方で科学 science とは「統制された条件のもとでの観察や精密な定義、反復可能性 (または再現性) に重点を置く態度や方法」であり、「統制 control、精密さ precision、再現性 replicability」の 3 点を重視する。とするならば 21 世紀に向けてますます進展する保険会社

等の主導するマネジドケア *managed care* に合わせていくら科学的であろうと努力しても、まだまだ大半の心理学の研究 *research* はとても科学 *science* とは言いようがない。実践家 *practitioner* へ向けて開かれている科学者 *scientist*、あるいは実践 *practice* へ向けて開かれている科学 *science* (これが「科学者でもある実践家」モデルを支えている) とは、学究活動 *scholarly work* まで拡張された概念であり、「カウンセリングの事例に関する哲学的な問いかけや歴史的な分析、思慮深いが非数量的でほとんど統制されていない分析」も含みこんだ「知識や理解を専門的かつ思慮深く探究すること(知識への探求心 *the search for knowledge*)」なのである。日本では軽視されがちであるが、「実証的研究 *empirical research* を行わずに理論的な論文(臨床理論や個々の事例から得た仮説など)を書く者は「科学者でもある専門家」モデルにおける科学者の役割を有効に果たしている」(p.57 : 52頁)と著者は断じている。

なおカウンセリング心理学を含めてアメリカの心理学系大学院の実践的な履修ガイドとして、*American Psychological Association (2008). Graduate Study in Psychology, 2009. Washington, DC: American Psychological Association, 999pages, ISBN 978-1-4338-0395-6* があり、ここには本学と提携している *Alliant International University* に関する紹介が専攻別に掲載されている(pp.38-66)。

第3のテーマはこうした「科学者でもある実践家」モデルをもつカウンセリング心理学の全体的な実践体系、具体的には介入の対象・目的・方法等を総合・統合した構造化モデルである。本書では2つのキューブ(立方体)モデルが紹介されている(以下の記述順に、pp.593-4 : 559-560頁およびpp.170 : 163-164頁)。

先ずモリルらのカウンセリング36面モデル(1974) *Morrill, W.H., Oetting, E.R., & Hurst, J.C.(1974). Dimensions of counselor functioning* は、介入の対象 *Target of Intervention*、介入の目的 *Purpose*、介入の方法 *Method* の三次元からなるキューブを想定し、介入の対象として個人・一次 *primary* 集団・関連 *associational* 集団・機関 *institution* またはコミュニティ *community* の4要素を、介入の目的として治療 *Remediation*・予防・発達の3要素を、介入の方法としてメディア *media*・コンサルテーションと訓練・直接的サービスの3要素をあげて、 $4 \times 3 \times 3 = 36$ 個の組み合わせからなるモデル(ルービック・キューブ型の整理箱をイメージするとわかりやすい)を提示した。これで見ると、カウンセリング(広義)の実践は例えば不登校については対象として「個人」を、目的として「治療」を、方法として「カウンセリング(狭義)の直接的サービス」の小箱に分類されることになる。

このモリルらの立方体モデルを修正し、人種的・民族的マイノリティ等の多文化に対応した心理学的サービスを視野に入れたものがアトキンソンらのカウンセリングに関する三次元モデル *Atkinson, Kim, & Caldwell, 1998 Three-dimensional model for counseling racial/ethnic minorities* である。

このモデルでは、介入が援助 *Helping* に変わり、さらに目的→目標(予防か治療か)、対象→問

題の原因の所在(問題が内的な原因で起こっているのか、それとも外的な原因で起こっているのか)、方法→文化的適応(マジョリティの文化への適応が高いか、それとも低いか)となっている。この組み合わせによって $2 \times 2 \times 2 = 8$ 通りの心理学的サービスの担い手が表現できる。それらは、カウンセラー counselor やセラピスト psychotherapist、コンサルタント consultant、変化の代理人 change agent、アドバイザー advisor、擁護者 advocate、文化固有のサポートシステムを促進する者 facilitator of indigenous support system、文化固有の治療法を行う者 facilitator of indigenous healing methods と呼ばれる。

ここからカウンセラー counselor やセラピスト psychotherapist の役割を考えると、例えば進学校特有の学校文化・生徒文化によく馴染んだ生徒が内的な原因で問題を生じる(た)場合に予防的あるいは治療的に援助する担当者でしかないと言うことである。こうした文化に馴染めない生徒が内的な原因で問題を生じた場合にもし治療的に関われば、それに対しては「文化固有の治療者」であるし、予防的に関われば「文化固有のサポートシステムの促進者」と言うしかない。カウンセリングは当該文化に対してどのような意味があるのか無自覚ではいられないのである。なおカウンセリングのキューブ(立方体)モデルに関して私は共同研究を続行している(自主シンポジウム「事例研究のあり方その1」日本教育心理学会第49回総会発表論文集, S54-55, 2007; 自主シンポジウム「事例研究のあり方その2」日本教育心理学会第50回総会発表論文集, S46-47, 2008)。

以上3つのテーマに即して本書を紹介してきた。最後にこの延長線上で日本におけるスクールカウンセリングあるいは学校教育相談の特殊性を簡潔に浮き彫りにするとどうなるか。先ずスクールカウンセリング(スクールカウンセラー)が学校におけるカウンセリングという実践活動であるとすれば、その中核になる心理学的な土台は臨床心理学でも学校心理学でもなく、カウンセリング心理学と言うことになる。また40年以上の歴史を有する学校教育相談 School Counseling Services by Teachers in Japan は学校教育活動を中心に構成すべきであるが、教師性と相談者性の接点を再度見つめ直そうとすれば当然にもカウンセリング心理学という心理学的な基礎づけが必要不可欠になるであろう。悪い意味でも、良い意味でも日本におけるスクールカウンセリングあるいは学校教育相談が特殊性(課題)を帯びたのはカウンセリング心理学を十分に含み込まなかったからである。本書が広く研究者や実務家から受けいれられて、日本におけるスクールカウンセリング(スクールカウンセラー)・学校教育相談実践が真に「科学者でもある実践家」モデルへと転換する契機になることを期待している。

最後に、本書には表表紙等二葉に原著者名の、また 38、163、188、590 頁等に誤植がみられるが、再版の際に訂正されるであろう。

**(ブレーン出版刊、2007年4月発行、617頁、ISBN 978-4-89242-899-9、
本体価格 18,000円)**